

手

吾人の所見を以てすれば、此政治界及び學術界より宗教界に及ぼすの影響に就ては基督教は多少不幸を被るべきも、佛教の爲めには却て幸となることなきに非ず、故に佛教は自ら進みて此大勢を歓迎せざる可らず、此大勢こそは佛教が復活を得るの一大氣運と謂ふべけれ、吾人が數年前宗教革命論を著はしたるの趣旨は全く此の理由を説明したるに外ならず、今や吾人は宗教革命論の趣旨を約して聊か之を讀者に示すべし、

宗教革命論の趣旨によれば人類宗教の思想漸次發達するものにして、その發達に三大時代あり、第一は多神教の時代、第二一神教の時代、第三凡神教の時代是れなり、蓋し多神教の時代は各國民互に隔絶して世界と云ふ一大觀念未だ起らず、人類の思想猶ほ事々物々の現象に拘泥して、未だ宇宙萬有を支配する一定不遍の法律を發見する能はざる時代と伴ふべく、一神教の時代は各國々民の交通既に開けて、世界と云ふ一大觀念既に發生し、宇宙萬有は一大規律の下に支配せらるゝの眞理を發見したるの時代と伴ふべく、凡

宗教思想
發達の三
大時代

神教の時代は宇宙萬有は同一の勢力同一の元素より發達すと云ふ時代に伴ふものにして科學哲學の思想にして進歩するものは是れ一神教たる基督教將さに衰へて凡神教たる佛教將さに盛んならんとするの徵候なり、然らば世界の佛教各派は争ふて此學術進歩の時代を歓迎せざる可らず、然るに彼れ喇嘛教の如きは羅馬舊教と同じく此文化の大勢を以て佛教の天敵なりとして之に抵抗せんと試るが如きは豈に眞理に悖らざらんや、是れ吾人が喇嘛教の爲めに大に惜む所なり、

然れども佛教にあれば基督教にあれば、教會發達の歴史と比較して之を觀るときは、亦た同一の現象を呈するを見るなり、釋迦と云ひ耶蘇と云ひ一大改革者として當時に顯はれたるを以て始めは唯たその教理の眞理と道德の勢力によりてその教を宣べ、その道を傳へ、敢て一定の儀式を立てず、敢て國家の援けを假らず、唯だ教祖其人の徳によりてその教を開きたる者なり、故に此時代を稱して教祖親化の時代と云ふ、既にしてその信徒漸く増加し、その教基漸く鞏固なるに従つて一定の儀式を立て、一定の教理を立つるの必

要を生ずるに至る故に此時代を稱して教儀の時代と云ふ、斯の如く一定の儀式を立て一定の教儀を立つるは即ち是れ教會を立つるの基礎にして、其間種々の異説を生ずるを免れず、故に此時代を稱して教派分立の時代と云ふ、又た宗教は其始當時の人心と風潮とに逆ふて起りたるを以て、世に容れられざる所あるが爲めに其眞理を強て傳播し、若くは強て之を實行せんとするときは當時の人心と風潮とを代表する社會若くは政府の爲めに迫害せらるゝを免れず、故に此時代を稱して迫害の時代と云ふ、然るにその信仰の勢力勝利を占め社會多數の人心を支配するに至れば、其時の君主若くは大政事は却て之を利用して以て民心を籠絡せんと欲し、遂に之に保護を與へて政務の一致を圖る故に此時代を稱して保護の時代と云ふ、然るに教會一たび此保護の下に發達するときは信仰よりは寧ろ驕傲に流れ昔は他に迫害せられしもの今は却て他を迫害するに至る、故に此時代を稱して教會驕盛の時代と云ふ、教會にして一たび此驕盛の時代に達するときは、其教理は漸く死文となり、其儀式は漸く死儀となり、大ひに當初教祖の精神に悖

るものなきにあらず、此に於て宗教革命の聲大ひに起る故に此時代を稱して教會革命の時代と云ふ、然れども革命にして一たび開くときは其勢種々の教派を生ずることを免れず、之を稱して各派分離の時代と云ふ、然るに一教の全躰に着眼するものは之を愛へ、教會をして教祖本來の純潔なる眞面目に復らしめ、後世に生じたる種々教理と儀式とを排斥して以て各派の統一を圖らんとするの精神を發するに至る、故に此時代を稱して統一の時代と云ふ、今や佛教も基督教も既に分離時代より漸く進みて統一の時代に達したり、然れども此統一なるものは今後數十年の後に行はるべき手將た數百年の後に行はるべき手、豫め測定すべきにあらざるなり、以上滔々千萬言の長文を費して辨別せし所一言以て之を約すれば世界の三大宗教特に佛耶兩教が世界國家及び個人に及ぼしたる感化の勢力と性質とを比較したるに過ぎざるなり、されば吾人は是れより更に一步を進みて佛耶兩教の教理は姑く措て之を論せず、唯だるの教會として得る所の勢力は安くに存するや、他語以て之を言へば既往に於ては何如なる種類の教

佛耶兩教
が勢力を
得る内因
外因

會が最も能く勢力を得せし手將來に於て勢力を得るものは何如なる種類の教會なる乎の一大問題を研窮すべき也、
蓋し佛耶兩教が教會として勢力を得るの方法に就ては内因外因の二種ありとす、内因とは教會の内部に存するの勢力にして、外因とは教會の外部に存するの勢力なり、教會の内部に存するの勢力とは他にあらず、一は教理的の勢力にして他は人物的の勢力是れなり、而して此二種の勢力は共に皆な教會の中心たるべき勢力なり、今試に一例を擧げて之を言はん、彼れ舊教に於ける羅馬法皇の如きは其の教理に附會して、我れこゝは耶穌十二徒弟の首堅たる彼得の眞正なる繼承者なりと稱し、又彼は上帝の代理者として此世界に統臨するを以て經典に關する一切の疑義を裁斷するの權能ありとし、又たその言ふ所は一切眞理にして無過失なりとの主義を唱へたり、苟も斯の如きの教理を唱ふるの教會にして一たび信仰を得るに至ればその勢力は悉く皆な教會の中心に集りて君主獨裁に類するの教會を現出せざるを得んや、是れ羅馬教會が中古以來勢力を得たる所以にして、彼れその教

會の鞏固なる結合之によりて生じ統一なる勢力之によりて生じ活潑なる運動之れによりて生じ信徒の熱心なる歸依之によりて生じたるも亦た怪むに足らざるなり、されば今日にありても羅馬法皇は主權者の地位を占め、數百の監督は之れが臣隸となりてその命に服従し、而して數千萬億の舊教信徒は全世界の各地に分散し法皇を仰戴すること、恰も猶ほ衆星の北辰を環拱するが如くなるものは是れ全く羅馬舊教が教理的の主義に基きて法皇政治を立てたるの勢力に職由せずんばあらず、尤も法皇を一個の私人として之を論ずるときはクレゴリーの如きインノーセントの如き英邁雄俊の人物に乏からずと雖も決して盡く英物のみにあらず然らば羅馬教會の勢力は全くその法皇に存するの勢力にして、法皇の權能はその人物よりも寧ろその教理に存するの勢力たらずんばあらず、
佛教各派の教會に於て、羅馬教會に類するの勢力を有するものは獨り喇嘛教なりとす、是れ亦た教理的に附會したるの勢力也、抑も喇嘛教は宗喀巴を以て教祖とし、宗喀巴は衣鉢を以て之を西藏國王達賴喇嘛に傳へたりと雖

ども、達頼喇嘛はろの國王なるが故に敢て教主世襲の例を開かず、ろの教理に附會して曰く、佛陀現世に生れて一切衆生を濟度するものなり、故に我れ一たび死するときはろの精神必ず他に轉すべしと、之を稱して肉身轉生の佛陀と云ふ、故に達頼喇嘛は一種の方法を以て此の轉身を探索するの教理をば後世に垂れたり、此に於て喇嘛教の信徒はろの教主達頼喇嘛を視て以て活佛となせり、顧ふに釋迦滅度以來印度に於ては馬鳴の如き、龍樹の如き、世親の如き、支那に於ては達磨の如き、智顛の如き、我邦に於ては傳教の如き、弘法の如き、法然の如き、親鸞の如き、日蓮の如き、千古卓絶なる高德大徳世に應じて現出したりと雖ども、未だ活佛を以て自ら許すものあらず、ろの信徒も亦た活佛として崇拜せざりしなり、而して獨り喇嘛教の高僧のみ活佛を以て自ら許し、信徒も亦た活佛を以て之を崇拜す、ろの教會の勢力豈に中心に榮らざるを得んや、然り而してその所謂活佛なるものは何如なる人物なるやと問へば、毫もろの常人に異なる所あるを見ず、彼等の智徳も亦た盡く卓絶なりと謂ふ可らず、然らば喇嘛教會の勢力は全く此活佛の勢力に存す

と雖ども、此活佛の勢力は彼の羅馬法皇の勢力と同く教理に存するの勢力にして、人物に存するの勢力にあらざるなり、

故に佛教にありては喇嘛教會の如く基督教にありて羅馬教會の如く教理の主義により、ろの教會の首領を以て上帝若くは佛陀の代理者或は權化者なりと唱ふるものは、至大至強なる教會を形成することを得べくして勢力の大感化の強素より怪むに足らざるなり、然れども此の如き勢力は全く教理に出でたるものにして、他の佛耶兩教の教會の如きは敢て企及すべきにあらざるなり、何となれば教理によりて教會を建設すべきも、教會を建設せんが爲めに教理を作爲すべからざるを以てなり、

然らば教會に於ける理想的の勢力は、姑く此佛耶二派の教會にのみ限るとして抑も他の教會は何如なる方法を以てろの勢力を増進すべきやと云ふに、蓋し人物的の勢力に依るの外他あらざるなり、例へば路錫の如きウエスリーの如きは羅馬法皇の如く神權を有すと唱へざるも、各々自己の人物によりて一宗を開くことを得たるが如く、達磨大師の如き、智者大師の如き弘

法大師の如き、見真大師の如きは自ら佛陀の權化なりと唱へざるも、其信仰其學識其道德を以て各々一宗の開祖と仰がれたるが如きは、全く是れ人物的の勢力なりと謂はざるを得ず、然れども是等の人物の如きは千百年間絶て無くして僅にあるの人物なれば、今日佛耶各派の教會は其の教會の内に於て其信仰其學識其道德の最も卓絶なるものを撰立して一派の管長とするに外ならざるなり、然らば各派教會は此人物の何如によりて盛衰消長するを免れず、然れども此管長の撰立に就て政界の撰舉競争の如く競争を生ずるに至りては亦又大に宗教の爲めに悲まざるを得ざるなり、

然り而して茲に着眼すべきことは彼の教理的の主義によりて建設せられたるの教會は勢力の強大過度なるを以て其權力動もすれば世の國家と相衝突して漸く困難に陥るを免れず、蓋し羅馬教會の如きは法皇の權力至高にして嘗て各國の内地外交に干渉せしも、今や各國は擧げて此干渉を非難し各國の君主宰相は心筋に法皇の權力を忌みて之を削弱せんとするの思念は彼等の腦裡を去らざるなり、然れども羅馬法皇は羅馬の一隅に屏居し、

壯麗なるパチカンの宮殿を以て之を伊太利政府の手に移したるに係らず猶ほ歐洲全國及び世界の各地に多數なる信徒を有するを以て歐洲各國の君主宰相と雖も、羅馬法皇に向つて公然抵抗を試るものはあらず、是れ羅馬法皇が依然として其の勢力を失はざる所以なり、之に反して喇嘛教の如きは其の教會の組織の權力は甚だ羅馬法皇に似たる所あるにも係らず、羅馬法皇程の勢力を有せざるを以て支那の乾隆皇帝の爛眼は早くも喇嘛教主が過大なる權力を得て國家の權力と衝突するに至らんことを懼れ而して此過大なる權力の源因は即ち活佛現出の教理に存することを看破せしかば、肉身轉生の説を以て迷妄なりとし、之に易ふるに普通の撰立法を以てしたり、然らば喇嘛教は將來に於て既往の如く盛大なる發達を見ること能はざるべし、蓋し羅馬教の如き喇嘛教の如きの教會は國家と並立すること能はざるものあればなり、

然らば佛耶兩教が教會として勢力を得るの外因とは何んぞや、即ち國家より受くる所の保護是れなり、今や歐洲全陸にある基督教が國家より受けつ

ある保護制度は前に説きし所の如くなるが、此保護は獨り基督教のみに限らざるなり、既往の歴史に就て之を觀るに中央印度に於ては阿輸伽王の如きの保護者あり、錫蘭に於てはマシタガミニー王の如きの保護者あり、支那に於ては後漢の明帝、梁の武帝及び隋唐元の諸帝の如きの保護者あり、百濟に於ては聖明王の如きの保護者あり、我邦に於ては聖武天皇の如きの諸帝あり、是等の王侯若くは帝皇が佛教を保護したるの勢力は果して何如や、然らば吾人豈に是等國家の保護を稱して佛教會が勢力を得るの外因なりと云はざるを得んや、

斯の如く内外二因に分ちて佛耶兩教が既往に於て勢力を得たりし所以を考ふるときは、兩教將來の發達は何如なる方針に向ふべきや、亦た以て之を推知すること或は難からざるなり、

顧ふに社會は宇宙に於ける一大機體にして、宇宙進化すれば社會も亦た進化せざる可らずと云ふ一大學説は、今日漸く世人の了解する所にして、殆んど争ふ可からざるの眞理なり、故に此社會進化の大法に照らして佛耶兩教

宗教感化の前途

の前途を判斷するときには、必ず違からずして一大變動を見るに至らんとす、此一大變は果して何如なる變動なるべき乎、吾人の所見を以て之を觀れば、佛耶兩教が物質的の感化は漸く一變して精神的の感化となり、社會的の感化は漸く一變して個人的の感化となり、儀文的の感化は漸く一變して信仰の感化となり、征服的の感化は漸く一變して平和的の感化となり、是れなり、是れ獨り社會進化の大法と一致するのみならず、亦た宗教固有の目的に適合するものなり、乞ふ吾人をして少く此説の意氣を説明せしめよ、抑も社會進化の理法は分業の法を以て最も著明なりとす、蓋し古代社會に於ては農は一人にして祭司と兵士とを兼ね、道徳は法律と混じり、宗教は教育と混じり、社會は唯だ尨雜なる混合體にして、その機關及び職分の範圍は毫も定まらず、而して宗教の勢力は最も至大なるを以て政治、法律、習慣、道徳、技藝、文學等亦た皆な宗教の裡に含蓄せられたり、試に古代の政治を見よ、一として神權に基かざるものあるか、古代の法律を見よ、一として神事に因せざるものあるか、古代の道徳を見よ、一として宗教の訓誨に出でざるものあ

るか、古代の技藝を見よ、一つとして宗教の儀式に關せざるものあるか、古代の文學を見よ、一つとして宗教の頌歌に起らざるものあるか、然れども社會漸く進化するに従つて、分業の法始めて生じ、農夫は専ら耒耜に従事し、商賈は専ら賣買に従事し、工師は専ら錐鑿に従事することを得るが如く、政治、法律、技藝、文學亦た皆な政治の外に獨立して範圍を異にするに至れり、されば國家は宗教の力を假り、宗教は敎家の力を假るが如きは畢竟するに社會分業の法未だ發達せざるが爲めなり、此理を推して之を考ふるときは、佛耶兩敎共に今日の社會は未だ進化の極に達したりと云ふべからず、蓋し露國の如きは希臘敎會を以て政略的手段となし、彼得帝の遺訓を奉じ之を以て民心を懷け、平時敵國の内にもその敎を傳播し一朝事あるの日には援ひて以て自國の羽翼となさんと欲し、又た既に彼の種族を征服するときは希臘敎を布きてその思想を一變せんとするが如き、又た英國が強逼手段を以て基督教を印度國民に傳播するが如き、其他基督教の宣敎師が野蠻未開の人民に基督教を傳播する手段の如き、是れ皆な征服的の感化にして平和的の感

化にあらざるなり、又現今佛教各派に於ても基督教の各派に於ても動もすれば儀文を重んずること其度に過ぎて、却て信仰を輕んずるの傾向なきにあらず、抑も儀文なるものは宗教を助くるものにして宗教の目的にあらず、然れども社會未開の日にありては技術工藝多く宗教保護の下に發達したるを以て、既に文化進歩の域に達したる後にありても互ひに相聯絡して孰れが目的なるか孰れが手段なるかを判断するに難きものあり、是れ豈に宗教の發達の真相ならんや、故に真正なる宗教の發達は信仰的の感化にありて儀文的の感化にあらざるなり、次に佛耶兩敎は種々物質的社會的の進歩を以て自ら誇ると雖ども、元來宗教の目的とする所は精神的の感化にありて物質的の感化にあらず、個人的の感化にありて社會的の感化にあらざれば、自今百年の後は大に今日と趣きを異にすることなしと云ふ可らず、蓋し將來社會の進化其極に達したるの日にありては分業の法益々進みて政敎全く範圍を異にし、物質的社會的の文化を進むるものは政治及び實業の職分に屬し、精神的個人的の文化を進むるものは宗教及び教育の職分に屬す

本章の約

るに至らんことは敢て疑ふべからず現時英國の經濟學者マーション氏は論じて曰く、世の文化を進むるものは宗教と經濟との二大勢力に歸すと嗚呼佛耶兩教がその感化を一變して真正なる宗教の精神を顯はすものは吾人自今幾年の後にあるかを斷言すること能はずと雖も、吾人は社會進化の法によりて氣運の終に到達せんことを確信するものなり、

以上吾人が第四章に於て逐論する所之を約説すれば、先づ種々の點より三大宗教が感化の勢力と性質とを比較し來りて、佛教及び基督教は世界主義なり、唯だ儒教のみ獨り國家主義なりと斷案を下したり、然れども佛教と基督教とが實際に於て愛國の精神を養成するものは、その根本教理にあらずして宗派の分立より生じたる結果なりと、更に一段の論を進めたり

次に吾人は進みて今日白色人種が優勝劣敗の世界に立ち他の人種を壓倒し、獨り世界進歩の大勢を導くの勢力あるものは基督教を奉信するに源因すと云ふ一大理論を排撃して、或る一種の謬想を破し又佛教に關する種々の謬想を破し、又た歴史上より基督教國と云ふ一大觀念の起源する所を觀

察して、佛教は何故に斯る一大觀念を養成せざりし乎と云ふ問題を研究したり、而して吾人が最後に論じたる點は三大宗教教會の組織にして最も精密に之を比較し、更に一步を進めて佛耶兩教の盛衰消長する源因及び兩教將來の發達をも力を盡くして研究したり、

第五章 結論

吾人は世界の三大宗教、即ち佛教、儒教及び基督教をば教祖、教理、教會の三個に分拆して之を研窮したり、されば教祖は一個の人物也、教理は一個の思想也、教會は一個の社會也、而して吾人が此三個を研窮したるの方法同一ならず、教祖と教會とは歴史上の一大現象として之を研窮し、獨り教理は宗教上若くは哲學上の一大思想として之を研窮したれば、或は個々撞着なる結果を生じたるの觀なきにあらざる也、

伊藤伯の
比喩

然れども分拆にあらざれば真正の總括をなすこと能はず、何となれば個々の眞理を見るものは全軀の眞理を見んが爲めなり、若しこれ吾人が世界の

三大宗教をば斯の如く教祖、教理、教會の三個に分ちて研窮したるの結果を以て即ち是れ個々撞着の結果に外ならずと誤解するものあらば、吾人は一瞥を擧げて之を破るべし、試に彼の衆議院の議事堂に立ち、三百議員に對して演説したるの伊藤伯を觀よ、彼れは唇を破りて聲を發したり、彼れは足を踏み、頭を動かし、手を揮ふたり、彼れはコップに水を注ぎて之を飲み、彼れは眼光を放ちて聴衆を眺めたり、是等の舉動は素より伊藤伯の一身を、離れざるなり、而して伊藤伯が風采の莊重なる、音吐の朗亮なる、何如に先づ聴衆の心を動したる乎、既にして演説漸く佳境に進むに従つて、頭を垂れて默思するものあり、眼を擧げて怒色するものあり、嘲罵するものあり、搦手喝采するものあり、滿堂騒然として潮の沸くが如くなり、然れども是等の動作は議事堂の外に出でざりし也。

然るに伊藤伯が此一大演説は帝國全體の既往に關し、現在に關し、將來に關するの演説なりと云ふ、是れ演説せしものは伊藤伯の一身なり、其言を聞て之に感したるものは三百の代議士なり、伊藤伯が演説の音聲を聴衆が之に

感動せられたるの動作とは亦た決して議事堂の外に出でざるなり、然らば何の故に此演説は帝國全體の既往に關し、現在に關し、將來に關するの一大演説なりと云ふや、是れ蓋し伊藤伯が演説したる裡に一大思想を含蓄したるを以てなり、此の思想は帝國四千萬人の安危利害をその裡に含蓄したるの一大思想なり、伊藤伯それ自身と雖ども、亦た帝國四千萬人の一人に相違なければ、伊藤伯此一大思想を案出したりと言はんよりは、寧ろ伊藤伯此一大思想を表彰したりと言ふの適當なるに如かざるなり、唯だ夫れ伊藤伯の位地と識見とを以てするにあらざれば、此一大思想を表彰すること能はざるのみ、

然らば世界三大宗教の教祖、即ち釋迦、孔子、耶穌の人物たる亦た豈に此に異ならんや、彼等は人類史上に於て一大偉人たりしに相違なきなり、彼等の品性はその一世を感動して凡そ人類行爲の模範たりしに相違なきなり、然れども此世界に生活したること僅に數年若くは數十年の歲月に過ぎざりしなり、抑も天地の大數を以て之を論ずるときは百年は一瞬に過ぎざる也、此

一瞬の間に生活したる人物は何如なる事業をなしたりとも、果して人類無窮の歴史に一大波動を生ずることを得んや、然らば彼等三大偉人が一大有力なる品性は亦た宇宙の一大思想を表彰したるに由りて勢力あるものなり、故に彼等が此事業と品性とを世界に示めしたる間は數年若くは數十年に過ぎずと雖も、彼等が表彰したる思想は絶大にして無窮なるの思想なり、唯だ此絶大にして無窮なるの思想は彼等の驚歎すべき品性と事業とにあらざれば表彰せらるゝこと能はざるのみ、然らば彼等が品性の價值も亦た至大ならずや、それ唯だ歴史は彼等の品性を示めして彼等の教理を説かず、故に彼等の教理を以て之を彼等の人物中に約したり、亦た唯だ教理は彼等の教理を説きて彼等の傳紀を示めさず、故に彼等の人物を以て之を彼等の教理の中に約したり、然れども、彼等の品性にあらずんば、何を以てか、彼等の思想を表彰せん、彼等の思想にあらずんば、何を以てか、彼等の品性をして價值あらしむることを得ん、されば吾人が教祖と教理とに分拆して研窮したるものは、亦た決して撞着の結果を見はしたるにあらざる也。

品性と教理

嗚呼人の品性はるの言辭に發し、行爲に發するものなり、言辭の美なるものは黄金の如く輝光ありて磨滅す可らず、行爲の善なるものは人を感化するの勢力あり、然れども宇宙最大の思想を表彰するにあらざれば、人類と共に存し天地と共に榮ふること能はざるなり、抑も宇宙最大の思想とは何んぞや、眞理是れなり、眞理に二つなし、孔子は人性の上に就て眞理を顯はし、耶穌は上帝の上に就て眞理を顯はし、釋迦は眞如の上に就て眞理を顯はしたり、故に人性の眞理は孔子品性の中に活き、上帝の眞理は耶穌品性の中に活き、眞如の眞理は釋迦品性の中に活きたり、然らば耶穌はるの淋漓たる鮮血の中に此絶大の眞理を流したり、釋迦はるの赫奕たる光明の中に此無窮の眞理を照らしたり、然らば彼等は足に全地を踏み、手に日月を轉すと云ふと雖も、可なり、豈に唯だ匹夫にして百世の師たり、一言にして天下の法たるのみならんや。

されば彼等は教會を起さずと雖も、教會は彼等によりて起れり、此教會の内に種々の人種を含蓄したり、種々の國家を含蓄したり、世界國民は國家を

以て子の父となし、教會を以て子の母となす、人類進歩の歴史は是等両親の教育に由れり、而して佛教にせよ基督教にせよ、教會は唯だ多數の人衆を集めたる一個の團體に過ぎざるあり、然れども教會は子の教祖の品性との教理の思想とを以て生命とし、燈火とす、此一大燈火にして輝くときは教會は眞に文化進歩の爲めに裨益あり、功業あり、若し此一大燈火の油にして盡るときは肉欲權勢の具たるに過ぎず、されば子の表面は何如に宏大なる殿堂壯麗なる儀式の服裝を附くると雖ども、子の燈火は既に滅せり、その生命は既に亡びたりと云はざるを得ず、抑も思想と感情と相合して精神をなすが如く、教會は教理を以て思想となし、品性を以て感情とせざる可らず、思想ありて感情なければ是れ唯だ冷々たる論理的器械也、感情ありて思想なければ是れ唯だ熱々たる多血的動物也、豈に以て完全なる人間とするに足らんや、子の以て完全なる人間とするに足らざるを知らば、亦た以て完全なる教會たるを知るに足らざるならん、

基督教は嘗て子の教會を以て之を擲亞の「アルク」に喩へたり、是れ豈に獨り

會 教理と教

基督教會のみならんや、佛教會も亦た擲亞の「アルク」なり、試に看よ、彼れ基督教が羅馬帝國以來上下千有餘年間、古代希臘羅馬の文化を以て之を教會の裡に保存して後世に傳へたるが如く、佛教も亦た我邦に於ける數百年間、文化の保存者となりしにあらずや、然れども吾人が佛耶兩教の教會を稱して擲亞の「アルク」に比するものは、子の教理と品性とを積載して此波荒らき世界を經過したるが爲めなり、嗚呼古來の歴史を緝き來れば、堂々たる帝國も幾多の變遷、幾多の顛覆に遭遇したるかを知らず、而して此幾多の變遷、此幾多の顛覆を遭遇する毎に、人類は滅絶し、萬物は蕩盡せんとす、唯だ教會のみ猶ほ教理と品性とを傳へて今日に至れり、然らば教會を以て人類の母と稱するも益し過言にあらざるなり、

世人記するや否や、彼れ佛國の大革命は唯だ政治的の一大革命なるのみならず、抑も亦た人心的宗教的の一大革命なりしなり、此革命が既に炎へ上りて頂上に達せんとするや、子の所謂國民會は教會を廢し、僧侶を廢するの議案を提出したり、當時議員の一人たるショウメットの如きは起つて宣言し

て曰く、彼れ堂々たる、エツチク風の建築を以て成りたる殿堂は、響きに虚妄の聲を以て響きしかども、今や始めて眞理の聲を以て響くに至らんとす、吾人は復た僧侶を有するを欲せず、上帝を有するを欲せず、唯だ自然の眞理を尊崇し、今まより此自然の眞理を以て之を彼の偽神の殿堂たるノートルマ
 ュの大寺院に移すべしと、此一議員の建議は忽ち採決せられて遂に基督教會を破壊して、之に代ふるに眞理の殿堂、自由の上帝、共和の音楽を以てするに至れり、而して此後未だ十年を出でずして基督教會は再び復活するに至れり、嗚呼、誰か此革命國民の爲す所は誰か兒戯に類せずと言ふか、耶蘇の如き偉大なる品性に包れたる眞理を棄て、之に易ふるに一時風潮の思想を以てせんとす、世界の三大宗教豈に此の如く薄弱なるものならんや、

今や有名なる哲學者にして、是迄世界に現存する宗教を以て満足せずして、純然たる眞理の宗教を建設せんと計畫するものは、世間既に其人に乏からず、亦た諸教の教理を研窮し、その教理の歸着する所を總括して、裸体的の眞理となし、その教祖の人物と品性と、の如きは之を不問に附して、以て諸教の

品性に包
 まれざる
 教理

外に一教を興さんと欲するもの世間亦た其人に乏からず、然れども毫も以て人類に感化を興へざるものは何ぞや、是れ蓋し一大眞理を遺忘したるが爲めにあらざんばならず、一大眞理を遺忘したりとは何んぞや、形式と論理とを以て組み立てられたる裸体的の眞理は人を感化するの勢力なし、唯だ品性を以て包られたるの眞理にして、始めて人を感化するの勢力ありと云ふの一大眞理を遺忘したるに外ならざるのみ、

眞正なる教會は教理と品性とを以てその精神となすを以て、誠に人類の母とも、挪亞の「アルク」とも稱すべしと雖も、教會は多數人衆の結合に成るを以て教會の歴史は、教祖必ず之が責任を擔當するものにあらず、耶蘇をして羅馬法皇が嘗て奢侈と驕慢とに流れたる有様を見せしめなば、必ず我名を假りて私欲を行ふの偽豫言者なりと云ふならん、釋迦をして今日僧侶の不法と放縱とに陥りたるの有様を見せしめなば、必ず菩提欣求の沙門にあらずと云ふならん、されば世人が三大宗教を論ずるに方りては、その教祖の品性を知らず、その教理の性質を知らず、唯だ教會が爲したる歴史上の出來事

のみを挺りて之を判断するが如きは、是れ未だ至當の見なりとせざるなり之に反して教會が世界に及ぼしたる感化の勢力と性質とを究めず、獨り教理と教祖とのみに就ての教を是非するが如きも、是れ亦た至當の見にあらず、故に教祖教理教會此の三個を總括して宗教始めて論すべきのみ、吾人が三大宗教の全軀を總括して觀察する所斯の如し、故に吾人が三大宗教を論ずるも亦た他人と意見を異にするものなきにあらず、吾人は三大教祖即ち釋迦、孔子、耶穌が遭遇せし時代と境遇とを見て、彼等が教育と思想との由りて異なる所以を知ると雖も、彼等が品性の偉大なると感慨の深切なるに至りては、同く之に感服したり、又た三大宗教、即ち佛教、儒教及び基督教が教理とする所は各々異なるにも係らず、此三大宗教が人類歴史の進路を一轉して一新時代を開き、各國各民に及ぼしたる至大至強なる感化に至りては、同く之を承認したり、嗚呼支那は孔子以來二十四朝の革命を経たり、而して尼山の麓に生れたる魯國の一大夫たりし孔丘が感化は今日猶ほ依然として存せり、印度は釋迦以來一たび希臘の爲めに蹂躪せられ、再び回

教徒の爲めに進入せられ、三たび蒙古の爲めに征服せられ、四たび英國の爲めに併呑せられ、其間幾回の變遷を閲みしたるを知らざるなり、而して雪嶺の麓に生れたる迦毘羅城の王子釋迦の感化は、東洋諸國に傳播して今日更に前途の多望を見るに至れり、猶太は耶穌以來全く異教の版圖に歸せり、而してガリヤの湖邊に彷徨したりしナザレの耶穌が感化は、殆ど全世界を舉げて之に風靡せんとするの勢あり、苟も宗派の見を脱して之を觀るときは、彼等感化の勢力も亦た豈に偉大ならずや、故に是等の三大宗教を論ずるには、彼れは非眞理なり、是れは眞理なりと絶對的に是非の判断を下すべきにあらず、唯だ何教が最も眞理の全体を得たるや、唯だ何教が僅に眞理の一部を得たりやと、比較的之が撰擇を下すべきのみ、

世には英雄崇拜と云ふ一種の主義を主張するものあり、是れカライル、エマ、ルソン諸氏が唱ふる所にして、蓋し彼等は此世界を以て大人豪傑が技倆を演すべき一大舞臺なりとし、世界文化の進歩は大人豪傑が精神と手腕とより發揮したるものなりとし、世界に行はるゝ思想及び主義よりも、寧ろ個人

の勢力を重視するものなり、故に此輩をして之を言はしむるときはプラト
 ヲは是れ哲學を表するの豪傑、ソエツキスビヤは是れ文學を表するの豪傑
 ナポレオンは是れ兵法を表するの豪傑、釋迦孔子耶蘇は是れ宗教を表する
 の豪傑なりと、平等一様に観去りて取て軒輊を彼等の間に措かざるべし、然
 れども是れ唯だ人物の點より、釋迦孔子耶蘇を見たるものにして、教理の點
 より釋迦孔子耶蘇を見たるものにあらず、故に此輩の見は釋迦孔子耶蘇の
 人物を説明するに足るも、以て釋迦孔子耶蘇の感化を説明するに足らざる
 なり、夫れプラトウ也、ソエツキスビヤ也、ナポレオン也、彼等は各々偉大なる
 脳髓を有し、偉大なる手腕を有したるに相違なきなり、故に彼等は唯だ後人
 の驚歎を博するに足るも、人類を感化するの勢力なきものなり、釋迦と云ひ、
 孔子と云ひ、耶蘇と云ひ、唯だ人類をして驚歎せしむるのみならず、亦た之を
 感化するの勢力あるものなり、抑も此感化の勢力は安くよりして來りしや、
 是れ即ち品性と教理と相合して斯る勢力を生じたるものなり、然らば彼れ
 カライル、エマルソンの輩は唯だ人性眞理の一部を見たるものにして、亦た

未だその全体を見たるものにあらず、彼等が釋迦孔子耶蘇に論及せざりし
 も亦た故なきにあらざるなり、

嗚呼至大なる思想、至大なる人物、至大なる歴史、基督教會の歴史を知らざれ
 ば、以て歐洲文化の歴史を解釋すること能はず、佛教及び儒教の歴史を知ら
 ざれば、以て東洋文化の歴史を解釋すること能はず、是れ豈に至大なる歴史
 にあらずや、耶蘇は木匠の子を以て基督と稱し、釋迦を棄て、正覺を開き、孔
 子は魯國の一大夫にして萬世の師たり、是れ豈に至大なる人物にあらずや、
 抑も亦た古今東西の宇宙に關し、人性に關するの思想は種々多端なりと雖
 ども、吾人は佛教、儒教及び基督教の外に誨へられたるの眞理を發明するこ
 と能はず、是れ豈に至大なる思想にあらずや、抑も世の三教を知らざるもの
 或は三大教祖を以て偏固なる道德者流とし、三大宗教を以て窮屈なる一種
 の形式的信仰なりと妄想するものなきにあらずと雖ども、是れ未だ三大教
 祖の何人たり、三大宗教の何物たるを知らざるものゝみ、三大教祖は心裡明
 快、春風和氣を以て充滿されたるの人物なり、孔子が暮春浴詠の問答と云ひ、

釋迦が法を説くときの巍々たる悦顔と云ひ、耶蘇が山上の垂訓と云ひ、何等の和樂なる氣象なるや、而して三大宗教の信仰は自由なる信仰にして、亦た儀式的の檢束を主とするものにあらず、若し然りとせば、是れ教會が私意を以て妄作したるものにして、三大教祖の本意にあらざるなり、

元の世祖の言
マルコポロ嘗て曰く、元の世祖は耶蘇、馬哈默、摩西及び釋迦を推尊して世界の四大豫言者となせりと、又た世祖嘗て各宗派の人が爭論するを見て、其手を揚げ之に謂つて曰く、幾指なるか、彼等答へて曰く、五指なりと、世祖彼等に謂つて曰く、五指即ち一手なるにあらずやと、世祖の意蓋し各種の宗教は皆な一大眞理に基きたるものなりと云ふにあり、吾人の如きは佛教を確信するものなりと雖ども、亦た世祖と多少同感の見を持するものなり、願くは佛教の眞理に基督教を容れ、基督教の眞理に儒教を容れ、佛界、天界、人界の完全なる宗教を建設せんことを切望するものなり、然れども吾人の理想は終に實際と調和す可らざるを以て、是れ唯だ一の空望たるのみ、然り而して三大宗教の信徒にして吾人と同一の見を抱くもの漸く多數を占むるに至れば、

吾人は宗教を研究するの機會を得たり

吾人の空望も亦た終に空望たらず、

今や我邦は世界の三大宗教を研窮するには最も適當なる地位にあり、吾人は法律上社會上の束縛を被らずして、自由に宗教を研窮し、又た之を評論することを得たり、蓋し彼れ歐米各國の如きは文化の進歩、學術の研窮を以て自ら誇るにも係らず、獨り宗教上の問題を論ずるに至りては、教會の權威を懼れ、輿論の擯斥を懼れて、容易に自由の說を吐くことを得ず、此に於て自說を擧げて輿論に従ふの學者あり、自己の固信する外に眞理の宗教あるを知らざるの學者あり、故に不幸にして此の如きの國家に生れたるものは、自由に宗教の問題を研窮し、自由に宗教の問題を評論することを得ざるなり、獨り我邦に至りては此の如きの束縛なし、是れ吾人が自由の說を立て公平の說を立つることを得る所以なり、

且つこれ儒佛二教の我邦に行はるゝこと既に千數百年間の久きを經過したり、故に吾人は唯だ儒佛二教の眞理を知るのみならず、亦たその感化の性質と勢力とを得たり、而して今や基督教は泰西の文化と共に駁々進入して

儒佛二教と相衝突し、彼れ攻撃すれば我れ辨難し、歐米各國に於ては争ふ可らざるの眞理としたる上帝存在説の如き、耶蘇神子説の如きは批評を受けたり、又た基督教は儒教及び佛教に對してはあらん限りの力を盡して之に反對したり、故に此宗教争論の中心に立ちたる吾人は最も精細に最も公平に三大宗教の教理を比較して、之を研窮するの機會を得たりされば、將來我邦に於て勝利を占むるものは佛教にあるか儒教にあるか、將た基督教にあるか是等は姑く別個問題として、苟も今日に方り眞理を求め國家を憂ふるものは最も心を潜めて三教の眞理及びその感化の性質を研究せざる可らざるなり、

吾人は嚮きに儒教を學び、次に基督教を學び、八九年前更に大に感ずる所ありて佛教眞理の研窮に従事し、釋迦の品性及びその教理に就て深く信仰を起し、遂に一個の佛教信徒となれり、此時に方りて佛教は漸く衰頹の極に達し、基督教は天を捲き地を動かすの猛勢を以て泰西文化の進歩と共に勢力を得て、佛教を壓倒せんとするの勢ありしかば、吾人は佛教信徒の本分とし

著者宗教
界に於け
るの經歷

て之を傍觀するに忍びず、慨然自ら奮つて佛教の挽回に盡力し、宗教革命論を著はし、一方に於ては佛教の眞理を説き、一方に於ては僧侶の惰眠を警醒したり、是を吾人が身を佛教界中に投じたるの始めなりとす、既にして破邪的の時代既に去りて、顯正の時代將さに來らんとするを看破し、組織佛教論を著はして之を公にしたり、然れども佛教の内部を見れば、停滞腐敗の極に陥り、到底一大革命を斷行するにあらざれば、以て法運の挽回す可らざるを察し、新佛教論を著はして之を輿論に訴へたりしに、佛教革命の氣運は猶ほ氷雪に埋られて春風未だ吹かず、此時に方りて頑固狂妄なる舊佛教の攻撃は吾人の一身に集り、彼の路錫が羅馬法皇に反對して、プロテスタントを主張したるの時も、雷のみならず光景なりき、然れども吾人が新佛教を主張して舊佛教に反對したるは、猶ほ嘗て佛教の眞理を説きて基督教の攻撃に抵抗したるが如く、吾人の精神は毫も變ずる所あらざりしなり、然れども今や基督教が佛教に對する非道理的の攻撃も漸く熄み、佛教徒も亦た虚心平氣に世界各宗教の眞理を研窮すべき平和の時代漸く到達した

るを以て、吾人も亦た公明正大なる眞理研窮の精神を以て三大宗教を比較せんと欲するの志を起し、遂に本論を著はすに至れり、抑も本論を一讀するものは必ず知らん、本論立論の躰裁と宗教革命論及び組織佛敎論立論の躰裁との間には著明なる差異あることを、是れ一は宗教革命論、組織佛敎論は佛敎辯護の精神を以て之を著はし、本論は比較批評の精神を以て之を著はしたるの差別あると、一は吾人講學の方針此數年來一變したるとの二大源因に職由せずんばあらざるなり、吾人は嘗て熱心に哲學を研究したりしが、今や哲學を抛ちて専ら歴史を研窮するの傾向を養成するに至れり、故に吾人が本論に於て研窮する所は獨り敎理の一章を除くの外、他は皆な歴史上の事實を以て論據となしたり、讀者乞ふ此意を諒せんことを切望す、

世界三聖論畢

謹儻 龜元

明治廿六年七月十七日印刷
同 年七月廿五日發行

定價金五十錢

著者

中西牛郎

熊本縣鹿野郡健軍村字神水二百二十三番地
當時大阪府西成郡曾根崎村
番外二百卅一番屋敷寄附

印刷兼發行者

岡島幸次郎

大阪市東區南久寶寺町四丁目廿一番屋敷

發兌所

岡島眞七

大阪市東區本町四丁目百五十四番屋敷

版權所有

同

岡島寶文館

大阪市東區南久寶寺町四丁目廿一番屋敷

同

岡島新聞鋪

大阪市東區備後町四丁目十九番屋敷

同

岡島支店

東京市日本橋區通三丁目八番地

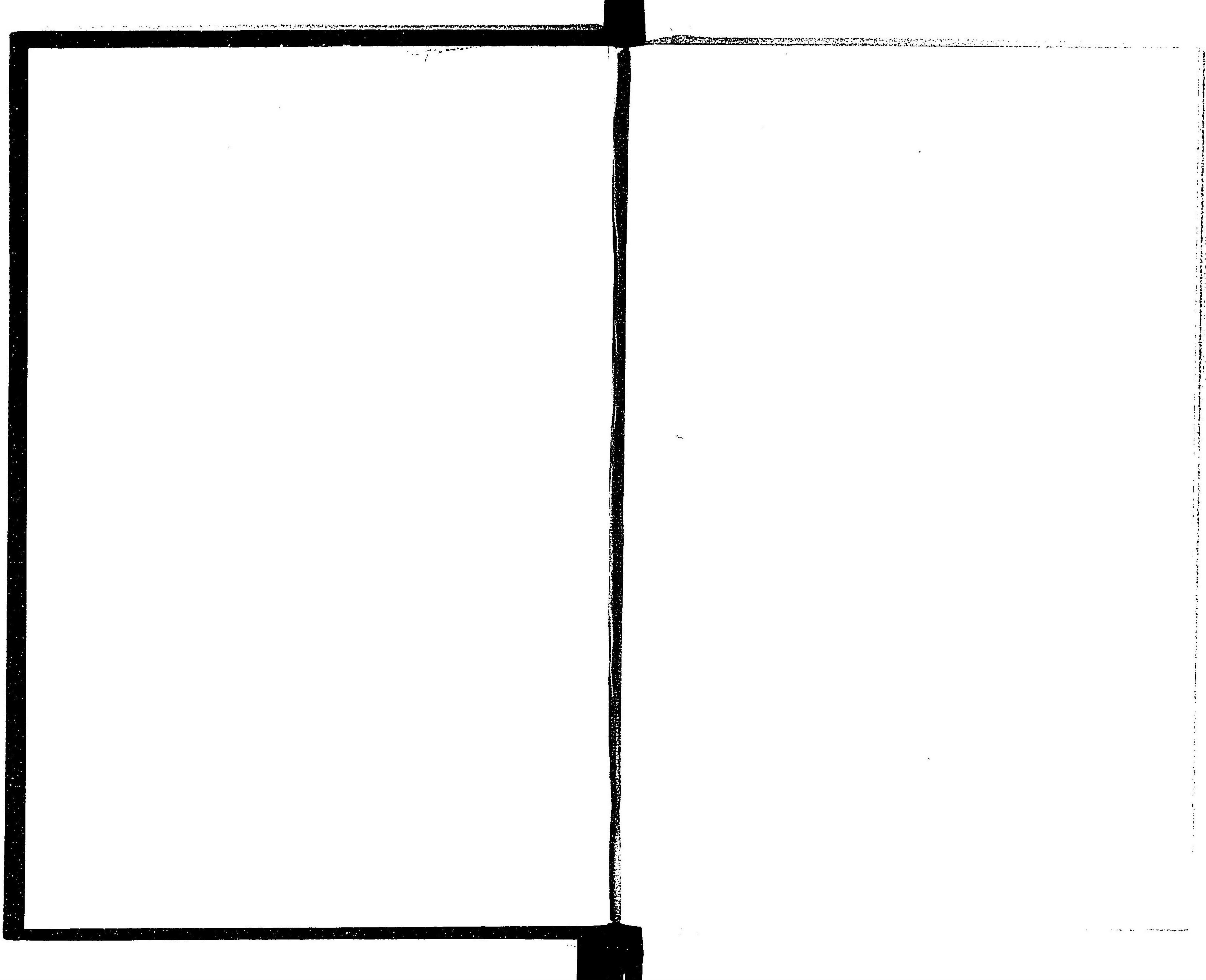
大賣捌所

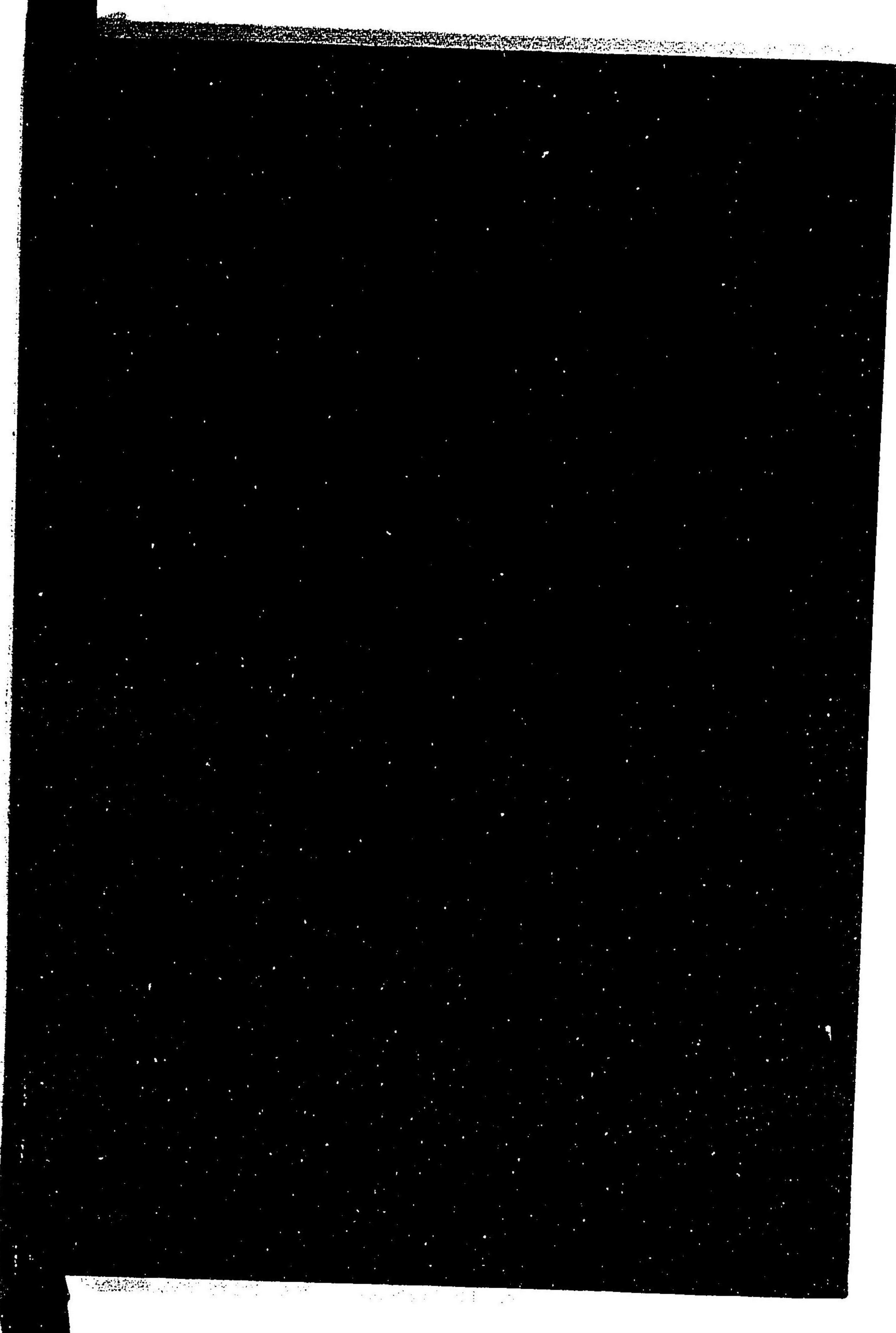
東京神田區表神保町	八尾新助	大阪心齋橋南一丁目	松村九兵衛
同 神田區表神保町	三省堂	同 北久寶寺町四丁目	三木佐助
同 神田區裏神保町	明法堂	同 北太郎町四丁目	柳原喜兵衛
同 神田區裏神保町	富山房	同 備後町四丁目	岡島支店
同 神田區一ッ橋通町	有斐閣	同 備後町四丁目	吉岡平助
同 神田區一ッ橋通町	博弘堂	同 備後町四丁目	梅原龜七
同 日本橋區通三丁目	丸善書店	西京東洞院三條	村上勘兵衛
同 日本橋區通一丁目	大倉孫兵衛	同 河原町二條	大黒屋書舖
同 日本橋區通二丁目	小林新兵衛	名古屋本町	片野東四郎
同 京橋區銀座四丁目	博聞社	肥後熊本新二丁目	長崎次郎
同 南傳馬町二丁目	目黒支店	鹿兒島十日市町	吉田幸兵衛

各地賣捌所

東京	北島茂兵衛	大阪	赤志忠七
同	水野慶次郎	同	鹿田靜七
同	辻岡文助	同	此村彦助
同	小林喜右衛門	同	中村正兵衛
同	杉本七百九	同	吉束次武
同	柳原友吉	同	平野藤七
同	吉川半七	同	湯川孫兵衛
同	目黒支店	同	若林茂助
同	中西屋邦太	同	梅原支店
同	開進堂	同	河合卯之助
大阪	田中太右衛門	同	清水幾之助
同	青木恒三郎	同	細川清助
同	此村庄助	同	福井源次郎
同	中川勘助	同	山中勘次郎
同	前川善兵衛	同	藤井孫兵衛
同	岡本仙助	同	杉本甚助

112
I3P94





013692-000-6

44-31

世界三聖論

中西 牛郎/著

M26

ABA-0163



